



## 「ドラえもん」に会えるかもしれない

浜中町立茶内小学校長 富田直樹



タイトルを御覧になって「何をばかなことを」と思われた方も多いのではないでしょうか。しかし、多くの未来予測からも明らかなように、子どもたちが活躍する未来社会は、想像以上に大きな変化があります。更に、新型コロナウイルス感染症の対応により、その変化は加速度を増しているようです。長生きすれば「ドラえもん」に会えるかもしれないという例え話も、あながち夢物語などとは言いきれなくなっているのではないのでしょうか。

そうした変化の激しい社会、日常の暮らしの中に人工知能（AI）などが普及する社会においては、一方的に知識を教えるだけの教育を行っていても期待される人材を育成することはできません。知識の習得はもちろん重要ですが、身の回りに生じる問題に自ら立ち向かい、その解決に向けて異なる立場の人が力を合わせながら、状況に応じてベストな解決方法を探り出していくことのできる人材こそが求められているのです。また、様々な知識や情報を活用・発揮しながら自分の考えを明らかにしたり、新しいアイデアをクリエイトしたりできる人材が期待されています。

こうした新しい社会で活躍できる人材育成に向けては「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）を明らかにすることが重要です。学習指導要領には、「育成を目指す資質・能力の3つ柱」が次のように示されています。

- ①何を理解しているか、何ができるか  
（生きて働く「知識・技能」の習得）
- ②理解していること・できることをどう使うか  
（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）
- ③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか  
（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

ここに示された育成を目指す資質・能力が、子どもたち一人一人に確かに身に付くようにするためには、「何を学ぶか」（教育課程の編成・実施）と「どのように学ぶか」（授業改善）が重要なポイントになってきます。

これまでのような一方的に知識を教え込む「チョーク・アンド・トーク」の授業、子どもたち一人一人が受け身の授業を大きく改善していかなければなりません（「教師に教えてもらう授業」から「子ども自身が学び取る授業」へ）。なぜなら、そうした受け身で教師中心の授業では、実際の社会で活用できる学力が育成されるとは到底考えることができないからです。学習する子どもが、自ら取り組む学びこそが求められています。



私たちの目の前の子どもたちは、「ドラえもん」に会えるかもしれない、そんな時代を生きていきます。そのためには、子どもたちに、「どんな資質・能力が必要なのか」を常に明確にし、その実現のために、「どんな教育課程を編成し、どんな授業を展開していくのか」を考えていく必要があります。なお、学習指導要領について更に

詳細な情報をする場合、「学習指導要領ウェブサイト」を検索してみてください。

